令和３年度学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立工業高等学校

重点目標		具体的取組		主担当	達成度判断基準	分析（結果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1	ICT を効果的に活用した指導方法の工夫・改善により、生徒の主体的で協働的な学びを支援し、思考力や表現力、コミュニケーション能力の育成を図るとともに、学習の成果を的確に評価することに努める。（学びのスタンダード）	①	県工学びのスタンダードと「Ｒ８０」を活用し、かつ学校研究の成果の拡充・継承を目標とすることにより、創意工夫されたわかりやすい授業を実践する。	教務課 各教科	「県工 Thinking time」や「Ｒ８０」などを通して、根拠をもとに論理的に発言したり、記述したりすることができるようになったと回答する生徒の割合で判断する。 Ａ　７５％以上 Ｂ　６５％～７５％未満 Ｃ　５５％～６５％未満 Ｄ　５５％未満	（教務課・各教科）最終評価（　Ｂ　） 「思う」「やや思う」と答えた生徒の割合が６７％であった。実施する教科科目に偏りがあり、全体としての取組になっていない点が反映されていると考えられる。 公開授業期間が前期後期の二回あるので、公開期間に「R80」の活用を進めていく。「県工 Thinkingtime」や「R80」はアクティブラーニング（AL）の一環として、授業ごとの実施ではなく、単元ごとの実施にしたり、1 回の授業全てを AL とするのではなく、必要に応じて短時間取組んだりするなどの工夫をしていく。
		②	教師個人及び各教科にて積極的に主体的・対話的で深い学びを取り入れた授業改善に取り組むことで、学習の定着を実現する。	教務課 各教科	予習・復習及び課題や資格取得に向けた学習等に取り組むことができたかどうかを、生徒対象の学校評価アンケートの肯定的評価の割合で判断する。 Ａ　８５％以上 Ｂ　７５％～８５％未満 Ｃ　６５％～７５％未満 Ｄ　６５％	（教務課・各教科）最終評価（　Ｂ　） 「できた」「ややできた」と答えた生徒の割合が８１％であった。授業で出された課題に取り組んでいる時間を復習ととらえていない生徒が一定数いるのではないかと考える。また、資格取得のために補習を受けている時間を学習時間ととらえていないことも考えられる。 様々な機会で学習に取り組んでいる自覚を持たせることも必要である。
		③	授業の情報化推進の一環として、ＩＣＴ機器の活用を促進し、学力の定着が実感できる授業を目指す。	学習情報課	ＩＣＴ機器の活用等により授業が工夫されていると回答する生徒の割合で判断する。 Ａ　７０％以上 Ｂ　６０％～７０％未満 Ｃ　５０％～６０％未満 Ｄ　５０％未満	（学習情報課）中間評価（ Ｂ ） 生徒対象の授業アンケートの「先生はＩＣＴ機器を効果的に活用した授業をしている」という項目の肯定的回答が６3%で、Ｂ評価となった。ICT 機器の活用に適さない実習科目なども調査対象となっているため数値が高くなり難いと考えられる。調査方法や設問に工夫が必要である。GIGA スクール構想が開始され Chromebook を使った授業が多く展開されるようになった。生徒全員が端末を持って活用する授業に向けて、さらに工夫や改善をしていきたい。

学校関係者評価委員会の評価	・コロナ禍の中、これまでと異なる環境の中でも先生方がご尽力され、ご指導にあたられたということについて、敬意と感謝を示したい。 ・生徒および保護者のアンケート結果から、予習・復習を全くしない、あまりしない生徒がかなりの人数に上っている。家庭での学習習慣をしっかりと身に着けさせてほしい。 ・アンケートではどうしても自己評価が甘くなり、生徒と先生との間に認識のギャップがある。結果をフィードバックしながらそのギャップを埋めていくことが生徒や先生の成長につながる。 ・校内研究授業の取組はうまく機能しているようで、大変良い。 ・授業評価アンケートについては、マークシートだけでは調査できない部分について記述式を設けることで様々な課題が見えることがあるので取り入れることも考えてほしい。また、ルーブリックの活用について毎時間は難しいと思うが、できるだけ活用したらよいと思う。R80についてはもう少しデータを頂きたい。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策	・授業評価アンケートに、生徒の負担に配慮して記述部分を設けることを検討する。 ・次回、ルーブリックとR80についての資料を用意し、各参加者に本校の取組を知って頂く。 ・授業の予習・復習や資格検定試験対策等において、Google for Educationのさらなる有効活用を図り、家庭学習を促進させる。 ・アンケートの結果を生徒にフィードバックし、主体的に学習に取り組む態度の養成を図る。

重点目標		具体的取組		主担当	達成度判断基準	分析（結果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
2	規範意識やマナーの向上の取組を通して、将来の職業人として高い意識を持った生徒を育成する。（人間力スタンダード）	①	校訓を掲げることにより、共通の理念のもと、一人ひとりの生徒の愛校心や帰属意識等、精神力を高め、将来の職業人に相応しい、規範意識や基本的生活習慣を身につけた生徒を育成する。	生徒指導課 各学年	日頃、生徒がしっかりと挨拶を行っているかどうかを、教師対象の学校評価アンケートの肯定的評価の割合で判断する。 A　８５%以上 B　６５%～８５%未満 C　４５%～６５%未満 D　４５%未満	（生徒指導課・各学年）最終評価（　A　） 「思う」が２５%、「やや思う」が６３%で、肯定的評価の割合は８８%であった。挨拶により存在を認められ自己肯定感が高まり、自己肯定感があるから表現できる生徒になる。積極的に挨拶ができる生徒を育てるには、粘り強く継続した指導が必要である。社会では挨拶が大切であることを、機会あるごとに指導し、挨拶の輪を広めていくよう工夫していきたい。
					遅刻者数（実人数）減少の割合で判断する。 A　前年比１０%以上の減少 B　前年比５%～１０%未満の減少 C　前年比０%～５%未満の減少 D　前年比増	（生徒指導課・各学年）最終評価（　C　） 遅刻者数は、１２月現在で３４８人（昨年度３５６人）と昨年度に比べ数は微減しているが、１２月までの登校日数は昨年度より１５日少ない。天候の悪い日は交通渋滞を招くことを予測できるが、天候の悪い日に遅刻数が極端に増加している。翌日の天気予報を確認し対応する時間管理ができるように指導していくとともに、授業の終始を含めた時間を守ることの重要性を学校全体や生徒個々に、組織的な指導を充実していく。
			周辺美化活動や除雪作業等のボランティア活動や県工ものづくりワールド等の地域との交流活動を通して地域に貢献する意識を育てる。	総務課	生徒が活動に積極的に取り組んだかどうかで判断する。 A　９０%以上 B　８０%～９０%未満 C　７０%～８０%未満 D　７０%未満	（総務課）最終評価（　　） 新型コロナウィルス感染症の影響で、本年度は実施せず。
		②	交通ルール等の遵守など、社会の一員としての自覚を高める。	生徒指導課 学年団	違反指導件数（累計）減少の割合で判断する。 A　前年比１０%以上の減少 B　前年比５%～１０%未満の減少 C　前年比０%～５%未満の減少 D　前年比増	（生徒指導課・学年団）最終評価（　A　） 石川県警察本部より毎月送られてくる自転車違反指導件数は、１２月現在で１２件（昨年度２１件）と昨年と比較すると違反件数は減少している。しかし、自転車通学時の交通事故がすでに１８件と多い。交通事故の件数や事例をあげ、急いでいてルールやマナーを守れていない時に事故が発生していることを伝え、交通ルールを遵守し、安全に自転車を利用するよう指導していきたい。
		③	いじめの早期発見・早期対応に向け、気になる情報についてはすみやかに共有し、組織的な対応を行う。	生徒指導課 全職員	教員相互の頻繁な情報交換により、問題を未然に防ぐことができていると思うかについて、教師対象の学校評価アンケートの肯定的評価の割合で判断する。 A　９０%以上 B　８０%～９０%未満 C　７０%～８０%未満 D　７０%未満	（生徒指導課・全職員）最終評価（　A　） 「できている」が４０%、「ややできている」が５６%で、肯定的評価の割合は９６%であった。問題を未然に防ぐためは、いじめは絶対に許さない姿勢を学校全体が持ち、風通しの良い風土づくりが大切である。いじめの問題は、教員が個人として対応することなく、情報を共有し組織的に対応するシステムの運用を強化し継続していく必要がある。

学校関係者評価委員会の評価	・臨時休業で生活のリズムが乱れ、遅刻の増加につながっていると思われる。学校として地道な対策をお願いしたい。 ・３年生が年度後半に遅刻が増える傾向については、やむを得ない面もあると思う。 ・基本的生活習慣や規範意識の育成は、家庭の指導によるところが大きい。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策	・遅刻について、学年別に傾向を分析し、学年集会やホームルーム等を通じて、繰り返し地道に指導を行っていく。 ・社会人として必要な規範意識の高い生徒の育成のため、挨拶の励行や規範意識・マナーについても粘り強く指導をしていく。 ・各保護者との連絡を密にすることで、家庭と学校が一体化した指導体制を整えたい。

重点目標		具体的取組		主担当	達成度判断基準	分析（結果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
３	専門的技能の習得をはじめ、資格取得や検定、コンテストに意欲的に取組、確かな進路実現を図る。（技能スタンダード）	①	就職希望者が１００％内定するとともに、第１社目受験での進路実現を図る。	進路指導課 ３年学年団	就職希望者が１社目受験で内定した割合で判断する。 A　９０％以上 B　８５％～９０％未満 C　８０％～８５％未満 D　８０％未満	（進路指導課・３年学年団）最終評価（　A　） 学校推薦１６７名のうち、１回目で内定した者は１６０名、不採用は７名であった。（内定率９５．８％） 再受験の結果、就職希望者全員の内定が１１月中に決定した。（最終内定率１００％） コロナ禍における面接練習や試験対策の不足にもかかわらず、担任及び学科の指導により例年並みの実績を残すことができた。また、ｗｅｂによる面接試験が実施される企業に対しては、進路指導課によるオンライン面接練習を実施した。
		②	生徒の将来に役立つよう資格取得指導に積極的に取り組む。	工業７学科 教務課	認定者数（特別表彰＋ゴールド＋シルバー）で判断する。 A　７０名以上 B　６０名～７０名未満 C　５０名～６０名未満 D　５０名未満	（教務課・工業７学科）最終評価（　D　） 今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、いくつかの資格試験の実施が中止となったことが数の減少に大きく影響している。 最終的には、特別表彰１名、ゴールド２２名、シルバー２０名、合計４３名が認定されている。（昨年度は、特別表彰３名、ゴールド２４名、シルバー１５名、合計４２名）
		③	全国レベルの各種コンテスト･コンクールにおいて上位入賞を目指す。	工業７学科	［地区予選を経て、全国大会出場となる競技や大会］の場合は、大会出場の難易度で判断する。 A　全国大会でベスト１６以上の成績であった B　全国大会に出場した C　ブロック大会で入賞した D　県大会で入賞した	［地区予選を経て、全国大会出場となる競技や大会］（工業７科）最終評価（ D ） 全国大会の多くが新型コロナウィルスの影響で中止された。また、数少ない開催大会にも進出することができなかった。 高校生ものづくりコンテスト旋盤作業部門石川県大会１位、３位入賞
					［地区予選がなく、直接全国大会出場となる競技や大会］の場合は、出場した全国大会の成績で判断する。 A　全国大会でベスト８以上の成績であった B　全国大会でベスト１６以上の成績であった C　全国大会で初戦突破した D　全国大会に出場した	［地区予選がなく、直接全国大会出場となる競技や大会］（工業７科）最終評価（　　） 該当なし
					各種コンテスト、コンクールの難易度で判断する。 A　全国レベルのコンテスト等で入賞 B　全国レベルのコンテスト等で入選 C　県レベルのコンテスト等で入賞 D　県レベルのコンテスト等で入選	各種コンテスト、コンクール（工業７科）最終評価（　A　） 「日本・モンゴル外交関係樹立 50 周年」記念ロゴマーク ジュニア優秀賞　２名 2021 明るい選挙啓発ポスター（中央審査） 文部科学大臣・総務大臣賞 公益財団法人明るい選挙推進協会会長賞

学校関係者評価委員会の評価	・就職実績は大変すばらしい。一方で早期退職者の実態をしっかりとつかんで対策を取ってほしい。 ・就職に関して、次年度はコロナ禍で採用状況が厳しくなることもあり得る。現２年生への対策をしっかりしてほしい。 ・大学では就職活動はほとんどオンラインである。高校においてもオンラインに対応する指導が必要になると思われる。 ・全国レベルの各種コンテスト・コンクールにおいて、コロナ禍で実施が少なくなっている中で、よい実績を収めていると感じている。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策	・早期離職防止のため、追跡調査と早期離職の多い女子に対して、２年生を対象に指導を行っているが、合格内定後の事後指導の中でも早期離職防止指導を行うようにする。 ・次年度の採用状況が厳しくなることを想定し、用意周到に就職支援を行っていく。 ・資格取得に向けた指導体制を強化し、次年度はB評価以上を目指す。 ・コンテストやコンクールに向けた指導を充実させ、生徒の能力を引き出し、進路実現につなげる。 ・各種コンテスト・コンクールを担当するベテラン教員の指導のノウハウを後輩教員に伝承する取組を実施し、成績の維持向上を図る。

重点目標		具体的取組		主担当	達成度判断基準	分析（結果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
4	学校行事や部活動等を通して、粘り強くたくましい体力と精神力及び周囲と協働する意識や社会性を培う。	①	活発な部活動を通して、加入率と成果の更なる向上に努める。	生徒会課	部・同好会活動に意欲的に取り組んでいるかどうかを生徒対象の学校評価アンケートの肯定的評価の割合で判断する。 A　８０％以上 B　７０％～８０％未満 C　６０％～７０％未満 D　６０％未満	（生徒会課）最終評価（　A　） 肯定的評価の割合は中間評価時より減少したが８３.７％であり、昨年度よりも高くなった。多くの生徒が部・同好会活動に意欲的に取り組んでいる。一方で、部・同好会活動に目標を見失いつつある生徒の存在もあり、退部や転部をする生徒がいる。部・同好会活動の目的や目標を顧問と生徒間で共有し、生徒が意欲を持って活動を続けるよう働きかけていきたい。
					県総体の成績等で判断する。（個人・団体あわせて） A　全国大会５部以上出場または総体順位男子２位以内 B　全国大会３部以上出場または総体順位男子４位以内 C　全国大会１部以上出場または総体順位男子６位以内 D　総体順位男子６位以下	（生徒会課）最終評価（　B　） 全国大会には男子バレーボール部、ボクシング部、柔道部、アスリートクラブ(水泳･飛込)の４部が出場した。県総体男子の成績は９２.５点で４位であった。上位３校の優秀校まで０.５点であった。全国大会に出場する部を増やすことに合わせ、県大会で上位入賞を目指して取り組むよう働きかけていきたい。
		②	学校行事に積極的に取り組む姿勢を大切にし、協調性や責任感など心豊かな生徒の育成を図る。	生徒会課	保護者の目から見て生徒が学校の行事に満足していると回答する割合で判断する。 A　９５％以上 B　８５％～９５％未満 C　７５％～８５％未満 D　７５％未満	（生徒会課）最終評価（　C　） 「満足している」「やや満足している」をあわせると８３.９％と中間評価時の９６％から下がった。ただ「わからない」が多く１２.８％であった。コロナウイルス感染拡大防止のため、制限や制約をして学校行事を実施してきたためと推察されるが、今後もコロナウィルス感染拡大防止対策を確実に行い、生徒が満足している様子が保護者に伝わるような学校行事を工夫して実施していかなければならない。
		③	歯科保健指導を通し、健康な生活を営むことができる能力の育成に努める。	保健課	歯科受診済の生徒の割合で判断する。 A　３０％以上 B　２５％～３０％未満 C　２０％～２５％未満 D　２０％未満	（保健課）最終評価（　A　） 1／31 日現在、歯科の受診率は全体で６２％、学年別の受診率は１年生７４％、2 年生６５％、3 年生４６％となり、昨年と比較しても受診率は向上した。今年度は保健だよりや掲示物での啓発活動をはじめ、新型コロナウイルス感染症の流行状況を踏まえながら、再三同報メールで受診を促した。また、生徒への個別指導を 2 回実施し、根気強く歯の衛生についての重要性を保健指導していったことが、受診率向上につながったと思われる。来年度も、今年度以上に歯科の保健指導や受診指導の充実を図り、生徒の健康管理能力の向上に努めたい。
5	教職員が相互に業務を点検・改善し、教育の質を落とすことなく組織的で効率的な業務の在り方を探る。	①	校務分掌ごとに業務の重複を点検し整理に努めることで、多忙化を改善する。	各科・学年・各課	定時退校日を半分以上達成している教員の割合で判断する。 A　８０％以上 B　７０％～８０％未満 C　６０％～７０％未満 D　６０％未満	（各科・学年・各課）最終評価（　A　） 80%以上の職員が、定時退校日を意識している。 その一方で、定時退校日以外の日に超過勤務を余儀なくされている実態もある。 一つの指標となる月 80 時間の超過勤務者は毎月 3%程度の 4 名程度である。 A 評価ではあるが、超過勤務時間が少ないわけでなく、業務の精選や効率化を進める必要がある。

学校関係者評価委員会の評価	・学校行事が縮小される中で、学習以外にも修学旅行や運動会を工夫しての開催に職員の努力を感じる。 ・コロナ禍の中で、学習以外にも修学旅行や運動会を工夫して実行していただいて感謝したい。 ・修学旅行ですべてのコースを練り直したと思われる。その労力は大変であったと思う。 ・部活動に参加している生徒が多いだけでなく、全国規模で活躍しているのは素晴らしい。 ・保健指導はコロナ関係だけでなく、歯科指導をはじめとして多岐にわたっており、その成果がよくわかる。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策	・部活動や学校行事等の課外活動をとおして、粘り強くたくましい体力と精神力及び多様な人々と協働することのできる社会性を培う。 ・コロナ禍で制限のある状況下であっても、様々な工夫を凝らし、可能な限り学校行事を進めていく。 ・保健指導を充実させ、生徒が自身の健康問題への関心を高め、自ら積極的に解決していこうとする態度の育成を図る。 ・保健室と担任が連携して保健指導を行うことで、検診後の受診率を上げる。

6	「新しい生活様式」を踏まえ、新型コロナウィルスへの感染リスクをできるだけ減らしつつ、生徒の健やかな学びを保障するとともに、生徒の心のケア、人権への配慮等、新型コロナウィルス感染症と共生していく学校運営に努める。	①	感染防止のための「新しい生活様式」の啓発活動と具体的取組を保健課が主体となり全職員共通理解の下で生徒を指導する。	保健課 全職員	「新しい生活様式」を踏まえて感染防止策に主体的に取り組んでいる生徒の割合で判断する。 A　９５％以上 B　８５％～９５％未満 C　７５％～８５％未満 D　７５％未満	（保健課・全職員）最終評価（　A　） 新しい生活様式での感染予防に取り組んでいる生徒の割合は、①の「取り組んでいる」が 692 人②の「だいたい取り組んでいる」が 223 人③の「あまり取り組んでいない」が 13 人④の「取り組んでいない」が 16 人であった。 ①と②の合計が生徒全体の 98.6%と感染防止策に意欲的に取り組んでいる様子がうかがえる。今後も保健課としては油断することなく、新型コロナウイルス感染症への感染リスクを減らすために新しい生活様式をますます浸透させながら、健康チェック(グーグル入力)など生徒が主体的に感染防止に取り組めるように指導を促したい。

学校関係者評価委員会の評価	・各企業でもコロナ対策には苦慮している。学校でのルールは整備されているので、生徒への徹底が課題であるように思える。また、大人から子供への感染が多いがマスクの着用でほぼ防ぐことができるらしい。マスクを着けていないときの行動について啓発してほしい。 ・ワクチン接種が進み、収まりかけたようであったが、新株の発生など感染拡大は依然脅威である。マスクの常時着用や自席での黙食、部活動の活動報告などを通じて職員・生徒に感染防止の意識が高いと感じた。 ・コロナ禍で PTA 活動が止まり、PTA の活動を継承していくことが難しくなっているのではないかと懸念している。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策	・今後もコロナ感染防止のため、生徒・保護者への啓発活動を様々な手法で粘り強く行う。 ・コロナ対応は迅速さを徹底している。今後もしばらくコロナ禍が続くと考え、対応ノウハウをしっかりと構築し、継承する。 ・旧 PTA の方々に現在の PTA 活動に参加ご協力いただくことで、本校の PTA 活動の縮小を避ける。